

ルポ—TIMS 国際会議に参加して

筑波大学 木島 正明

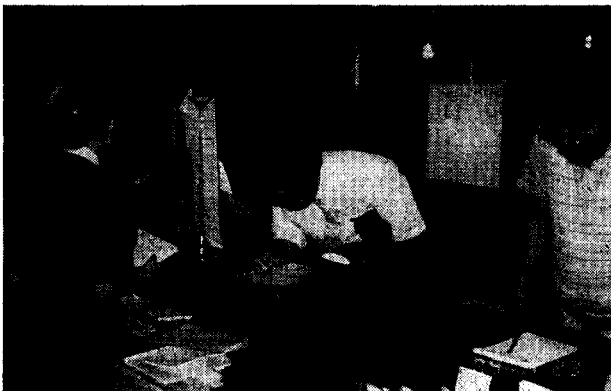
1. 7月23日から26日にかけて、TIMS(The Institute of Management Sciences: 経営科学会)の第29回目の国際会議が大阪ロイヤルホテルで行なわれた。海外からの参加者290余名、国内からの参加者190余名であった。筆者にとってTIMSの国際会議は2回目の参加であるが、3年前にオーストラリアのゴールドコーストで行なわれたときは、発表のキャンセルの多いことに驚いた記憶がある。友人の話だと、TIMSでのキャンセルの多いのは有名であるとか、はたして今回は、と思っていたが、存外に少なかったようである(20名程度。ほとんどが東側諸国からの登録者)。しかし、円高の影響からか、海外からの参加者の母数は最初から多くはなかったそうである(海外からの登録者数301名)。

会議の会場として大阪ロイヤルホテルが使われた。このホテルは、格としては、大阪で1番よいホテルとのことであるが、実際、きれいで雰囲気もよく、国際会議にも慣れていることがうかがえた。何回か外国での会議に出席したことがあるが、会場・設備が立派でいつも感心していたが、今回の会場はそれらに比べても見劣りせず、おおげさな言い方をすれば、誇らしげな気分さえなされた。外国からの参加者の評判も大変よく、経営科学を専攻されている外国人研究者には経済観念の特に長けている方が多いそうであるが、そんな彼らでも十分満足して

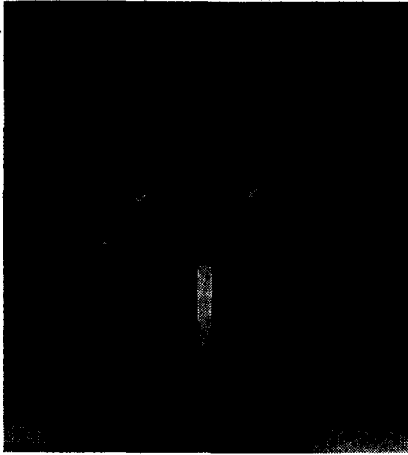
いるようであった。すべての準備にあたられた京都大学の長谷川先生、高橋豊先生はじめ関係者の方々の大変なご努力の賜物である。ここに、出席者の1人として、感謝の意を表したい。

23日午後6時頃にレジストレーションを済ませ、6時半からウェルカムレセプションを待った。その間に何人かの外国人参加者が声をかけてきたが、なかには初めて会う人で専門の違う研究者もいた。こういう場合の話題は、たいてい、「日本は初めてですか」とか「時差ボケはとれましたか」とかいう類のつまらないものであるが、それでも1人で来ている方には満足らしく話もはずんだ。配布されたプログラムの案内にも、“to greet old friends and meet new friends”のためにウェルカムレセプションへどうぞ、と書いてある。こういう雰囲気は国際会議特有のもので、日本国内の学会発表会では紹介者なしで話しかけられるなどということはまずない。時間となり、飲み物券を持って会場に入った。アメリカから数人の友人が来ているはずなのだが、前もって約束していたわけではないので、このパーティーで会えるのを楽しみにしていた。その前に腹ごしらえを、と思っていたら、森村OR学会会長が徐 APORS 学会会長と一緒にこられて、筆者を紹介してくださった。TIMSの前に APORS の会合があったとかで、森村先生もお忙し

そうである。そうこうしているうちに、徐々に会場が人で埋まってきて、筆者の友人たちや尊敬する先生方の姿もそこにあった。筆者はニューヨーク州にあるロチェスター大学経営大学院を3年前に卒業して日本に戻ってきたのであるが、当時の先生である、Freimer 教授、Lederer 教授にも思いがけずお会いできて感激した。また、同じロチェスター大学の住田教授、カリフォルニア・パークレー校(UCB)の Shanthikumar 教授、AT&TのSmith氏らと話し込んだ。筆者は元来大食いの方であるが、話に熱中して食べるのを忘れていたほどである。パーティー終了間際に気を取り直して、カレーライスを1杯だけ食べた。



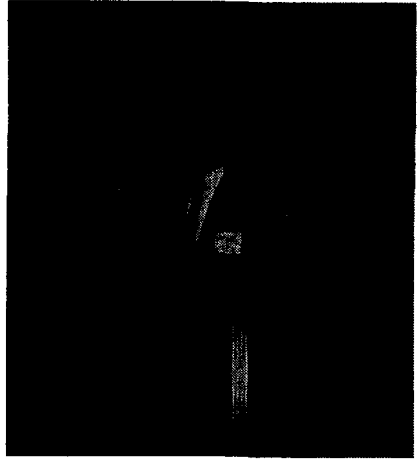
受け付け風景



松田元OR学会会長挨拶

カレーライスはこのパーティーの席では珍しいが、筆者の友人たちには評判がよかった。あっという間に時間が過ぎて、8時半、終了である。明日からの会議の成功を期してロイヤルホテルをあとにした。このウェルカムレセプションへの参加者は290余名であったそうである。

2. 24日午前8時半のオープニングセッションにより、1日4セッション14トラックで3日間の会議の幕が切って落とされた。1つのセッションは1時間半で、3～4つの発表があった。24日と25日の第1セッションはプレナリーで、他の10セッションは通常の研究発表である。松田委員長（元OR学会会長）の挨拶に始まり、TIMS会長等のお話があり、プレナリーセッションに移行した。JPC (Japan Productivity Center: 日本生産性本部) の宮井理事長が、日本企業における生産と品質向上のための人的資源 (human Resources) の役割、企業における経営哲学の日米の差、などについて話されたのだが、朝が早いにもかかわらず、多くの方が最初から出席されていた。筆者は不勉強で、経営学の defined terminology を知らないのでもうまくお話を要約できないのが残念であるが、専門の先生方の評価は大変高かったようである。日本企業における労使関係の良さは海外の注目するところであり、それが生産と品質向上のために大きな働きをしているのは周知のことであるが、宮井理事長はご自身の経験を通して、また具体的な数字をあげられて、ていねいにお話くださった。筆者のような門外漢にもお話しのエッセンスは伝わってきて、大変興味深かった。執行部のとりはからいか、会議の参加者



オープニングセッションでのTIMS会長挨拶

にはこの発表のレジュメが前もって渡されていたが、興味のある方はぜひこれを取り寄せてご一読されることをお勧めしたい。25日の8時半からもプレナリーセッションがあったが、私用で出席できなかった。有意義なお話しの聞ける良い機会であったと思うのだが、残念であった。

3. 10時半からの研究発表のセッションが始まった。筆者はルボを書く都合上、1つのトラックにへばりつくことにしたが、どうせなら自分にわかる話をともし応用確率のトラックにした。東工大の高橋幸雄先生のように、専門の話は別の機会に聞けるから今回は専門と少し違う話を聞く、というポリシーもあるが、(友人たちが発表しているので)人間関係上このトラックが無難である、という判断もある。また、このトラックでは、いわゆる有名人が結構発表していて、名前は聞いたことがあるが顔は初めて見るという人がかなりいて、そういう楽しみもあった。最初の確率ネットワークのセッションで座長を務めたAT&TのMitra氏、最初に発表したUCBのWalrand教授などがそうである。

この最初のセッションで、Mitra氏自身も4番目に発表したが、トヨタ自動車では始められたカンパンスシステムを直列型待ち行列網を使って定式化し、カンパンスシステムの優越性を結論づけていた。カンパンスシステムは、言わば日本式経営の経験論から出たもので、およそ数学モデルで定式化し議論できる類のものではない、と日本人は考えるかもしれないが、彼らはそれを直列型待ち行列の理論を使って研究するのである。しかも外国の一線級の研究者たちが、である。筆者は、自身の留学中にもこ



プレナリーセッションでの宮井氏の講演

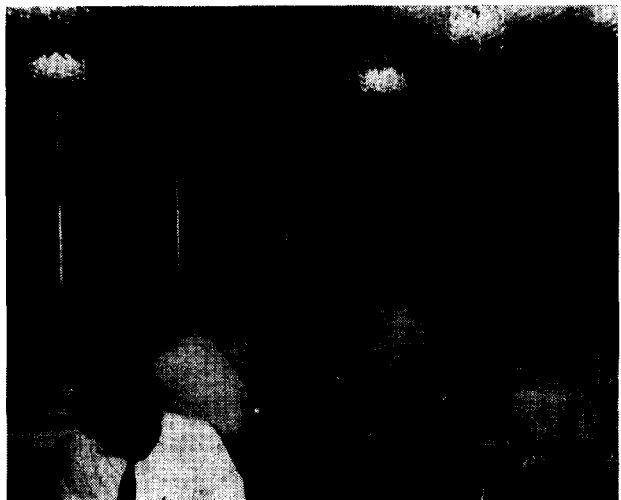


オープニングセッションでの徐A P O R S 会長挨拶

の種の驚きを感じたことがある。それは、数学モデルを導入し議論し、そこから得られた数学的特性・性質を調べることで、Kanban System や Just in Time System などの本質を理解しさらに発展させようという姿勢である。日本の研究者の中には、数学的アプローチ（いわゆるOR的手法）は役に立たないとして最初から相手にしない人もおられるようであるが、外国人研究者たちの真理探求の貪欲さ（もちろん論文を書くためもあるが）は見習うべきものがあると思う。

このトラックでは、日本人研究者もかなり発表していたが、皆さん慣れていらっしゃるのか、発表が上手で聞きやすかった。また、内容もあり、UCBのShanthi-kumar教授などは応用確率における日本人研究者のレベルの高さに感心しておられた。実際彼は、日本人研究者の来訪を歓迎するし、日本人と共同研究したい（現にやっている）とも言っていた。外交辞令だけとも思わないが、しかし他の分野も含めて、アメリカなどに比べると研究者の絶対数が少ないのは明らかである。さらなる研究レベルの向上のためには、筆者も含めて、特に若い人には、彼のような優秀な研究者の数多くいる外国で勉強してきてほしい、と思う。筆者のまわりを見渡してもこういう野心的な若い人の少ないこと、若い人を育てる・サポートする機関・機会の少ないことは大変残念に思う。もっとも、これは東工大でも問題になっているそうであるが、そもそも大学に残って勉強を続けたいと思っている学生の少なすぎるのが問題なのかも知れない

4. 参加者には6枚綴りのコーヒー券が渡された。午前、午後各1回で3日間、という計算であろう。しかし、筆者のように、発表を聞くよりも友人と話していることの方が好きな人には足りなかったかもしれない。幸い、筆者の場合は、第1日目だけで帰った友人から5枚余分にもらったので、ウェルカムパーティーで食えなかった分は取り戻したと思っている。このコーヒー券は、受付の後ろの部屋に設けられたコーヒールームと、ホテルのプールサイドにある洒落た喫茶室で利用できた。コーヒールームはセッションの合間になると満員となり、研究者間の交流には大変都合が良かったようである。また、喫茶室の方では美味しいアイスクリームが食べら



コーヒールームでの雑談風景

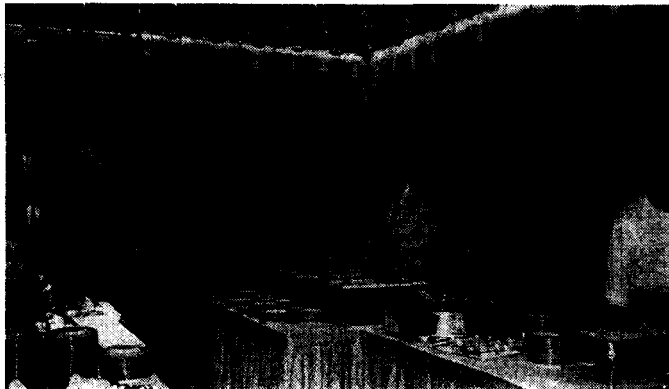
れ、眺めも大変よかったのだが、あんがい存在を知られていなかったようである。筆者も受付の人に聞いて行って見たが、最初、大きなホテルの中をうろろろしてしまった。

コーヒールームに陣取っていると、セッションの合い間の休憩に皆さんこられるので、多くの研究者と知り合うことができた。特に、専門外の方でも名前だけは聞いたことがあるかも知れないが、リトルの公式で有名な Little 先生にお会いできたのには大変感動した。先生は大変物静かな方で、どこにいるかわからないようなところがあ

って、他の日本人参加者は皆気がつかなかったようである。他にも、外国人ばかりでなく、学会以外ではめったに会うことのない関西の先生方と知り合えたり、実に有意義だったと思う。

5. 筆者はルポライターとしてはまったく失格で、パンケットに出席していないし、ツアーにも同行していない。研究発表の方も、元來他人の話を聞くのが苦手なので、全部のセッションに出たわけでもない。そこで、ここまでの話は筆者の感じたことを書き並べたのであり、以下のことは京都大学の高橋豊先生に教えていただいた事実である。

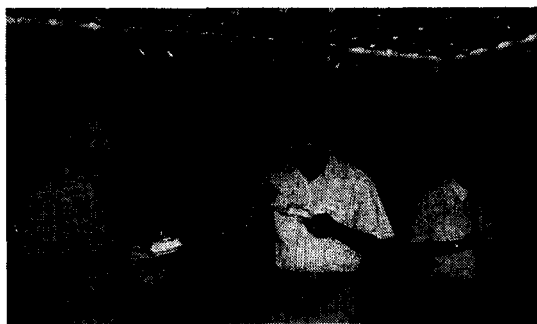
24日の夜のパンケットは、満員盛況で参加者は200名。出席したある先生が感心して話してくれたところによると、値段に比べて出てきた料理は豪華だったとか。また23日に奈良ツアーがあり参加者は110名。法隆寺、春日大社、東大寺をまわったとのこと。26日には大阪城と東洋陶磁美術館へのツアーがあり、参加者は30名。もっとも、研究発表の合い間にコーヒールームで聞いた話だと、大阪城へは会議の始まる前に1人で行ってきたという外



ウエルカムレセプション

国人もかなりいた。また、会議のあとには、広島へ原爆ドームを見に行く予定だという人もいた。ただし、27～29日には台風が九州を通過したので、広島への観光旅行が好天に恵まれたかどうか心配である。他に、TIMSの会議らしく毎日工場見学のツアーが用意されていた。24日には茨木市にある松下電器のテレビ事業部（参加者120名）、25日は神戸の三菱造船（参加者120名）、26日には白鶴酒造・美術館（参加者30名）、25、26の両日に阪神高速道路のコントロールセンター（合計の参加者は30名）、といった具合であった。参加者はほとんどが外国人であったそうである。

25日は、3大祭りのひとつである天神祭の日であり、先着120名を無料で招待したそうである。筆者は久しぶりの大阪ということで、友人宅へ遊びにいったが、高槻へ向かう阪急電車は激しいにわか雨に見舞われた。祭りの会場は大丈夫かと心配していたが、こういう企画は、特に外国人には興味深くタイムリーなものであったと思う。わずか4日間の会議であったが、多くの有意義な出会い・討論・意見交換等があったと思う。特に、遠くからやって来られた方には有意義な国際会議であったことを祈ってこのルポを結びたい。



ウエルカムレセプション